【190】

氏　名(本　籍)	長谷川（はせがわ）　浩（こう）　一（いち）（神奈川県）
学位の種類	教　育　学　博　士
学位記番号	博　乙　第　661　号
学位授与年月日	平成 3 年 3 月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	心理学研究科
学位論文題目	心像の鮮明性尺度の作成に関する研究

主　査	筑波大学教授	文学博士	金　子　隆　芳
副　査	筑波大学助教授		渡　辺　光　雄
副　査	筑波大学教授	文学博士	台　　利　夫
副　査	筑波大学助教授	医学博士	小　川　俊　樹
副　査	筑波大学教授	教育学博士	岡　田　　明
副　査	筑波大学教授		小　林　一　俊

論　文　の　要　旨

本論文は心像の鮮明性測定尺度の作成に関する報告であり，併せてその過程において心像の基礎的性質を実験的に明らかにしたものである。

〈論文概要〉

心像鮮明性尺度 SMI 原案の作成：

心像の鮮明性を自己評定形式で測定する心像鮮明性尺度 SMI（Scale of Mental Imagery）の作成にあたり，各種試案の検討を経て，視覚，聴覚，皮膚感覚，運動感覚，味覚，嗅覚，有機感覚の七感覚様相，九つのカテゴリィ，各カテゴリィ五項目，全45項目からなる SMI 原案を作った。

尺度は全ての手続きがテープ録音され，実施にあってはテープを再生して聴覚様相で被験者に提示する。すなわち閉眼状態で被験者に〈刺激提示〉し，〈心像形成（15秒）〉，〈自己評定と評定記入（20秒）〉の手順を繰り返す。被験者は心像の鮮明性を五段階で自己評定し，評定記入時のみ開眼し，所定の記号で回答用紙に記入する。

SMI 原案の特性：

SMI の尺度特性の検討のために，1,883名の被験者集団からの資料を得，これを基本資料として分析した。感覚様相別にみると，心像鮮明性は全体として味覚が最も高く，皮膚感覚がそれに次ぎ，嗅覚が最も低かった。性別では女子が視覚，皮膚感覚，嗅覚などに男子より有意に高い鮮明性得点を示した。

項目得点間の相関行列をもとに因子分析を行い，八因子を抽出した。第１因子には45項目全てが高

く負荷し，固有値（9.62），寄与率（65.9%）ともにきわめて高い値を示し，心像の鮮明性の共通因子と考えられた。第Ⅱ因子までで寄与率の累積は約75%となり，第Ⅲ因子以下の固有値は1.0を下まわった。

心像鮮明性尺度短縮版 SMI-S の作成：

SMI の実用上，その短縮版 SMI-S（Scale of Mental Imagery in Shortform）をつくった。短縮版は基本資料の因子分析により14項目を抽出したもので，原尺度に対して高い妥当性係数 r=.934 を示した。

短縮版 SMI-S の信頼性：

信頼性については，55名について60日間隔での再検査で r=.711，116 名についての一か年間隔での再検査では r=.505 という，いずれも有意に高い安定性係数をえた。同じく，116名について折半法でスピアマン・ブラウンの公式により r=.340 がえられた。また基本資料の中の SMI-S 14項目の因子分析の結果によっても，全ての項目が第Ⅰ因子に高い負荷を示し，心像鮮明性の共通因子をなしており，因子的整合性が確認された。

短縮版 SMI-S の妥当性：

SMI-S の104名についての総得点に関して基本資料との比較妥当性をとったところ，r=.843 の有意な妥当性係数を得た。

被験者260名の SMI-S の総得点と，マークス（1973）の「視覚心像鮮明性質問紙」VVIQ (Vividness of Visual Imagery Questionnaire）を外的規準とした基準関連妥当性として r=.399 の有意相関を得た。また両テストの合わせて30項目の項目得点間の相関についての主因子法の因子分析の結果では，第Ⅰ因子に両テストのほとんどの項目が負荷しており，心像鮮明性共通因子が抽出された。SMI-S と VVIQ との相関は互いに鮮明性の測定法としての併存的妥当性を保証してはいるが，SMI-S が多感覚様相心像を測定対象とし，VVIQ は視覚心像に限っているために高い相関になり得なかった。

SMI-S とその他の主観的心像検査法との関連として，ゴードン（1949）の「視覚心像の統御性検査」TVIC（Test of Visual Imagery Control）の総得点とは r=.266 の相関であった。この低い相関は SMI-S が心像鮮明性と統御性とをよく弁別していることの証左である。ちなみに VVIQ と TVIC との総得点間の相関は r=.390 であった。

SMI-S と他の客観的心像検査法との関連：

主観的評定法をとる SMI-S と，心像活動に基づくと見られる各種の作業検査（客観的心像検査法）との関連について382名を被験者として検討した。因子分析の結果，SMI-S は記憶能力検査，言語能力検査などとそれぞれ異なる心理的特性を測定していることが示された。

心像鮮明性と他の心理的諸特性との関連：

SMI-S の測定する心像鮮明性と他の心理的特性との関連について，SMI-S と人格検査による人格諸特性，記憶過程における記憶型，催眠感受性，学生の価値類型（専攻科目）などとの関連を相関分析ならびに因子分析によって検討した。

その結果として心像の鮮明性は，適応的で神経症的でなく内向よりは外向的な人格傾向と関連し，催眠感受性とも相関する資質であった。心像は記憶の能力，言語の能力，空間操作の能力など，心理学において知能の因子とされている諸能力とは独立する心理的特性であった。

学生の専攻分野の違いや個人の記憶の型との関連については，特定の専攻や特定の記憶の型と特定の感覚様相の心像との関連はなかった。

SMI の測定する心像鮮明性の一般特性：

心像の鮮明性という心理特性の測定用にSMIおよびSMI-Sが開発されたが，この尺度の測定する心像鮮明性は必ずしも視覚心像だけでなく，多くの感覚様相における心理体験を含む。しかし尺度の各項目の鮮明性あるいは各感覚様相の鮮明性の間には得点としての表面的な差異はあるものの，因子分析によれば，いずれも第一因子に全ての項目が高く負荷し，「心像鮮明性の共通因子」があると解釈される。

心像の鮮明性は個人内での感覚様相による差異，すなわち感覚様相特異的な特性ではなく，一般的な感覚非特異的な特性であり，しかも個人間差異の大きいものであることが示された。画像か命題かの心像論争をめぐっては，本研究は命題説に有利な資料を提供した。

審　査　の　要　旨

心理学における心像の研究は，過去半世紀以上にわたり行動主義の風潮の下に追放されていたが，近年，認知心理学における意識主義の台頭があり，心像研究そのものの復興もあって，「追放されたものの帰還」が実現しつつある。その意味で著者の研究は時宜を得ている。

しかし著者はかねて臨床実践の立場から独自に心像研究を行ってきたもので，心像の鮮明性尺度はその過程において必要となったものであった。著者の開発した測定法は刺激語の音声呈示という実験的方法を併用したところに特色があり，著者が実験心理学専攻であった研究歴の片鱗が見られる。その尺度は信頼性と妥当性について相当の検討を施し，心理学のテスト開発の必要な手続きを経ている。またすでに本尺度の開発過程において，感覚論的問題，人格論的問題について明らかにされるところがあり，心像論争にも一石を投じた。本尺度が臨床心理学や教育心理学の応用的実践のみならず，認知心理学，知覚心理学などの基礎的研究にとっても，さらに今後の活用が期待される。以上により本論文は教育学博士の学位論文として合格と認める。

よって，著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。